

伝え

日本口承文芸学会会報
創刊号 1987年9月

発行 日本口承文芸学会

〒160 東京都新宿区西新宿8-4-5
(財)ラポ国際交流センター気付
電話 03-367-2431 内線248

会報「伝え」の創刊にあたって

会長 小澤俊夫

日本口承文芸学会は、創立十周年を迎えた本年から、新たな事業として、会報を発行することになった。

会報発行のアイディアは、若い理事たちから提案され、若い理事と会員たちにより、編集のための委員会が設けられて、実行される。十周年にふさわしい、発足のあり方であったと思う。

本学会の従来の活動は、年大会と一、二回の研究例会、それに年一回の学会誌の刊行に留っていた。そのために、全国学会でありながら、全国各地の会員の情報交換・意思の疎通は十分でなかつた。

この会報が、その弱点を補うものとなるよう期待している。

そのためには、編集委員の努力もさることながら、全国各地の会員からの情報の提供、意見の寄稿が大切である。広い協力をお願いしたい。

また、会報を外国の研究者、研究機関に送ることも考えられるだろう。そうなれば、自然に、国際交流の道が拡大されていくと思うのである。

会員諸氏とともに会報に多大の期待を寄せるものである。

シンポジウム「口承文芸とシャーマニズム」

大林太良

今年の大会においては、本学会の大会としては初めてのシンポジウムが開かれた。報告者としては、大阪の福田晃、東京の桜井徳太郎、大阪の小松和彦、それに司会者として東京の大林が参加した。日本文化の根底にシャーマニズムがあるとか、シャーマニズムが日本の芸能や文学の発生に深くかかわると、従来主張されてきたが、それを具体的な口承文芸の資料によって検討しよう、というのが、このシンポジウムの狙いである。

福田晃の報告は、中世の本地物語「毘沙門の本地」を取りあつかっている。天竺狗留国善財王の申し子天大玉姫と、維縵国の金色太子は契りを結んだが、王子が摩耶国に行っている間、姫は太子を待ちこがれて死んでしまう。太子は梵天の王宮に姫に会いに行き、太子に毘沙門天王、姫は吉祥天女になった、という話である。これは、中世において、選ばれたものは霊界遍歴が可能だという信仰を表わしており、これを語り伝えたのは巫覡

の徒の末裔たる唱門師であった。奄美のユタが現在伝える「天の庭」という昔話は、オルペウス型の冥界訪問譚だが、これは毘沙門本地に対応する内容をもっている。

福田は、口寄せが本地語りにひびいた、という折口信夫の見解を引き、中世シャーマニズムと本地物とが深いかわりをもつことを論じた。

この福田報告は、日本の歴史の複雑さを反映した報告であって、中世において、シャーマニズムと口承文芸との間に、どのような在り方があったかをよく示している。また、オルペウス型の冥界訪問譚とシャーマニズムとの関係は、スウェーデンの宗教学者フルトクランツがつとに論じたところであり、世界的な広がりをもつ問題である。

次に桜井徳太郎は、唱導文芸ではなく、素朴な現代の昔話を問題にする。桜井は、巫女によって語られた昔話はなく、また昔話中に巫女が登場することはあっても、たいした活躍をしないことに

注目する。シャーマニズムにおいては、靈魂観が重要であるが、靈魂観にかかわる昔話として、遊魂譚があり、「夢買長者」もその例である。しかし、そこでは、(a)シャーマンは出てこない、(b)他界の描写はほとんどない、(c)睡眠中の脱魂をあらわす、(d)古代神話では靈魂は鳥になるが、ここでは昆虫になる、(e)致富譚であり、(f)靈魂の入れ替りを語る、という特徴がある。日本本土のシャーマニズムは、仏教の影響を受けておとなしく、貧弱になったが、他方、神仏習合の結果、唱導文芸はおおいに発達した。

以上の桜井報告は、重要な問題提起を含んでいるが、仏教がシャーマニズムや文芸に及ぼした影響については、東アジア的な規模での比較研究を必要とするであろう。

つづいて、最後の小松報告は、桜井報告が個人の靈魂に焦点を合せたのに反し、むしろシャーマニズムと口承文芸という問題の、社会的な次元をとりあげており、かつ説話のジャンルとしては、昔話よりもむしろ伝説を対象としている。

小松和彦は、つまり伝説をつくり出す存在としてのシャーマンに注目する。具体的には六部殺し型の伝説であって、何か不幸がつづいたりすると、それは旅の六部がむかし殺されたことがあり、この場所にたたるのだとシャーマンが語る。そして人々がこれを受け入れると、このシャーマンの話が、共同体の伝説になる。伝説のなかではシャーマンは姿を消している。しかし、語り出した者としてのシャーマンがいたのであって、こうしたシャーマンに、社会の緊張関係や、天変地異について、しかるべき説明を与えるのである。

以上の三人の報告につづき、討論に入った。その場合の問題点の一つは、説話の型であって、詮

宣がどういう契機で型をなすのかという疑問（大林、桜井）も出された。また、小松からは大林へ、冥界訪問譚と、シャーマニズムにおける脱魂型と憑霊型との関係について質問があったが、大林は、発生時はともかく、一度型として成立してしまうと、冥界訪問譚は面白い話であり、また宗教的職能者にとっては身近なテーマだから、シャーマニズムの型如何にかかわりなく、話が独り歩きする可能性を指摘した。桜井は、憑霊型と脱魂型を厳格に区別する学界の風潮に批判的であって、古代人にとっては未分化だったと考える。

福田は、語り物は専門家が語り、民間人は真似をするだけだが、口承文芸の範疇に入ること、かつて日本のシャーマンはそれなりに活動していて、神社巫女と歩き巫女とは全く違うものではなかったこと、また冥界に行った人がいるということが信ぜられていたのが中世だと指摘した。

司会者は、南西諸島研究者としての鹿児島県の山下欣一にコメントを求めた。山下によれば、奄美ではシャーマンの活動は、基層的・間接的に口承文芸と関係がある。シャーマニズムと昔話は、ともに虚構なる点において構造を同じくし、ともに現実→非現実→現実という型をとる。シャーマンにとっては、昔話は太鼓と同様に、非現実の状態に入るための道具である。

これに対して、小松から、(一)入神の過程の道具としての音、言葉と、(二)入神したあとに何をしゃべるか、を区別して考える必要が指摘された。

今回のシンポジウムにおいて、問題の複雑性が明らかにされたが、奄美からの山下発言をみても、東アジアのような大きな文脈で研究することによって、新しい見通しが開かれるのではないかと、思われた。

1987年度第2回研究例会

と き：1987年11月21日(土)

午後2時から5時まで

ところ：ラボセンタービル 8階(東京都新宿区)

テーマ：口承文芸とシャーマニズム

1. 石井正己(筑波大学付属駒場高校)

「巫覡と始祖伝承」

2. 神田より子(法政大学)

「巫女の系譜」

3. 板谷 徹(早稲田大学)

「朝鮮半島の巫俗儀礼」

なお、今年度は1988年1月ころに第3回研究例会を企画しております。

昭和63年度日本口承文芸学会大会予告

と き：昭和63年6月6日(土)、7日(日)

ところ：島根県松江市 島根大学

《仲間たち》

歌謡研究会（奈良）

真鍋昌弘

歌謡史・歌謡文芸の研究と歌謡の文献資料・口承資料の発掘紹介を目的とした、会員十余名のささやかな勉強会である。昭和61年4月の発足以来ほぼ隔月に例会を持ち、『承德本古謡集』の輪読と研究発表とを軸として活動を続けている。若い会員が多く、例会の席は和やかながら、いつも熱気に満ちている。機会をとらえて、各種民俗芸能の鑑賞や古跡散策も会員の楽しみとなっており会場としては、奈良教育大学・甲南大学・関西外国語短期大学を順にめぐっている。また、できれば今年度中に小さな会誌第1号を発刊して、会員それぞれの成果をまとめたいと願っている。事務局は、〒630 奈良市高畑町 奈良教育大学・真鍋昌弘研究室。次にこれまでの例会の様子を記しておきたい。

第1回：昭和61年4月26日 於奈良教育大学。宮岡薫『承德本古謡集』（1）（東遊一歌）、真鍋昌弘「綾小路俊量卿記五節間野曲の歌謡」。

第2回：昭和61年6月28日 於奈良教育大学。松村嘉幸『承德本古謡集』（2）（東遊二歌・駿河歌一）、永池健二「法文歌の場と表現」。

第3回：昭和61年8月2日 於甲南大学。中村睦『承德本古謡集』（3）（駿河歌二・三・四）、米山敬子「見し人の歌－伝説と創作－」。

第4回：昭和61年11月1日 於関西外国語大学。加賀元子『承德本古謡集』（4）（求子歌・片降）、宮岡薫「『続日本紀』の歌垣について」。

第5回：昭和61年12月20日 於奈良教育大学。佐佐木聖佳『承德本古謡集』（5）（アラタ・ヤマトメ）、下仲一功「小歌圈歌謡における降達節の位置」。

第6回：昭和62年2月21日 奈良市史跡文化センター。「伝統芸能フェスティバル」鑑賞。

第7回：昭和62年3月15日 於春日大社・不退寺・奈良教育大学。春日大社御田及び不退寺蔵在原業平絵参観、松村嘉幸『承德本古謡集』（6）（ナバブリ）、中村睦「夜叉ヶ池伝説一文

献に見る伝承の変遷」。

第8回：昭和62年6月27日 於甲南大学。和泉朋子『承德本古謡集』（7）（タノシリハヤシ・スガムラ）、黒木祥子「近藤清春の歌謡絵本」。

《こえ》

一期一会のお話を

佐藤涼子

先日、区内の一児童センターから、ディキャンプで“きもだめし”をするので、その前に“こわいお話”をしてほしいとの依頼がきた。早速図書館の男子職員に夕刻から行ってもらった。翌日、どうだった？と尋ねると、得意のこわいお話と、土葬のお墓に足をつっこんでしまった子どもの時の体験談をおまけに語ってきたとのこと。そして、子ども達がしっかり目を見て話を聞いてくれたと、嬉しそうにつけ加えた。

彼が区役所の全く別の課から図書館に異動してきた時、図書館の児童サービスでは、子どもとことばの、そして子どもと文学の橋渡しをする大切な活動として、ストーリーテリング（平たくいえばお話を語ること）を行なっているといったら、「えっ、図書館でそんなこともするんですか」とびっくりしていたものだ。自分のお話と語る場に出会えると、誰もが語る力を発揮できることを、いつも再認識させられる。

私の勤める区（東京都品川区）には図書館が十館一分室ある。昭和六十年度の統計では、何らかの形で図書館員からお話を聞いた子は、延べで区の児童人口の25%強になる。まあ延べだからパーセンテージはあまり意味をもたないかも知れないが、図書館でお話を語ったり紙芝居を演じることが、やっと日陰の身から表へでてきたと喜びつつ、なんで図書館でというこだわりもやっぱりすこしもっていたいと思う。

しかし、お話も一期一会。保育園のお散歩で来館する一才児から中学校への学級訪問まで、いいお話を語っていききたいものである。

会報「伝え」の発行について

本学会の今年度からの新規事業として、会報を発行することになりました。B5版、4ページ横組みのスタイルで、年2回、2月と8月ころに発行します。会報名「伝え」は、会報編集委員会（委員長・小島美子）で検討ののち、運営理事会で承認されたものです。会員のご寄稿をお待ちしています。（会報編集委員会）

新刊リストについて

1987年1月から7月に発行された新刊リストです。紙面の都合により、その一部を掲載します。文献目録の作成を検討しております。口承文芸関係の新刊、雑誌（特集、論文、記事、書評など）、大学紀要、新聞記事などの資料をご提供ください。著書、抜刷などを学会にご寄贈いただきますようお願い申し上げます。

新刊リスト

- カレヴァラ物語（世界の英雄伝説1） 高橋静男編訳 筑摩書房 87.6
 ケサル大王物語（世界の英雄伝説9） 君島久子編訳 筑摩書房 87.3
 語りの伝承 矢口裕康 鉾脈社（宮崎市田代町263） 87.5
 日本民俗研究大系7（言語伝承） 国学院大学編 87.3
 佐々木喜善（第2巻） 遠野市立博物館（遠野市東館町3-9）
 ヒメの民俗学 宮田登 青土社 87.7
 民俗調査ハンドブック（新版） 上野、高桑、福田、宮田編 吉川弘文館 87.7
 扇谷おつる（岩手・衣川の昔ばなし） 常光徹、花部英雄 みちのく民芸企画（北上市堤ヶ丘1-1-5） 87.1
 中野の昔話・伝説・世間話（中野の文化財No.11） 中野区教育委員会 中野文化センター郷土史料室（東京都中野区中野2-9-7） 87.3
 五箇村の民話 島根民話研究会（松江市馬潟町366-38 酒井方） 87.5
 因伯昔ばなし（13） 鳥取民話研究会（鳥取市栗谷町26 鷺見方） 87.5
 佐々木徳夫昔話記録（3）（狐の頭巾） 佐々木徳夫 ひかり書房 87.5
 語りの世界（5）（イメージのみなもと） 語り手たちの会（保谷市新町4-12-25 桜井方） 87.5
 民話と文学（18）（アジアの民話） 民話と文学の会（東京都足立区千住曙町6-6-110） 87.6（寄贈）
 昔話ー研究と資料ー（15）（昔話と伝説） 昔話研究懇話会 三弥井書店 87.6
 昔話伝説研究（13） 昔話伝説研究会（東京都渋谷区東4-10-28 国学院大学文学部第十研究室） 87.7
 国立歴史民俗博物館研究報告書第9～11集 国立歴史民俗博物館 87.3（寄贈）
 山形民俗（創刊号） 山形県民俗研究協議会（山形市霞城町1-8 山形県立博物館内 野口一雄受付） 87.3（寄贈）

入会希望者は入会申込書をご請求ください。入会金1,000円、年会費4,000円。

入会申込書請求・送金先：〒160 東京都新宿区西新宿8-4-5（財）ラボ国際交流センター気付日本口承文芸学会事務局（TEL. 03-367-2431） 振替：東京8-44834

The Society for Folk-Narrative Research of Japan. c/o Labo International Exchange Foundation, Labo-Center Bldg., 8-4-5 Nishishinjuku, Shinjuku, Tokyo 160, Japan.

口承文芸に関心のある方を広くご紹介ください